

## タイムマシンに乗れば

夕方まで賑やかだった蝉時雨が涼しげな虫の声に変わり、田んぼが黄金色の絨毯のように広々とひろがっている。夕暮れ時は遠く鳥海山がシルエットとなって浮かび、低く伸びる稜線の上に、夕焼け雲がたなびいている。

先日、高校の同窓会があって、40年ぶりに当時の仲間たちと会ってきた。高校卒業して40年が経ち、家庭にあっては子どもが独立し、仕事ではそこそこの責任を任される立場となって、皆それぞれ外見は同じように年を重ねたオジサンとオバサンになってはいたが、高校時代という、おそらくは人生で一番光を放っていた時代をともに過ごした記憶は色を失わずに、たちまち鮮やかな色彩と手ざわりを伴って、目の前に映写機で映し出されるようであった。

私たちの高校時代は、学生運動の残り火がまだあちこちでくすぶり続けている時で、社会そのものがお前はどうか生きるのか、と問いかけてくるような、ひりひりした緊張感と圧迫感のある時代だったような気がする。

高校生活も、だから、学校や教師との関係は、それは一部の生徒たちであったかも知れないが、反発、反目、批判といった、およそ教育的には好ましいとは言い難い関係で、そんな中で生徒たちは教師や学校を通して社会そのものへの批判的な志向を強めていった。



そこには現代の高校生が感じている生き難さとは違った生き難さがあったように思う。若者にありがちな性急さで、生きることの意味を自問し、社会の不正に憤り、正義や価値といった問いと向き合って、答えを求めてもがいていた。

高校時代のそのような記憶が、同窓会という簡易タイムマシーンによって蘇り、あの頃の焦燥や不安、刃物を突きつけられているような緊張感やローラーコースターのような感情のアップダウンなどが、思い出された。

私がタイムマシーンで遡行した時代を、みんなは今この瞬間に、生きている。取り巻く時代環境は異なるが、高校生特有の鋭敏さや未熟さは同じように抱えているだろう。

そして、40年が経ったときに、今、様々な困難に突き当たって途方に暮れていたとしても、必ず青春の一コマとして、それは自分の生き方に多様性を与えてくれた得難い経験として了解されているはずである。今、心を覆ってしまっているかに見える黒い雲も、40年経てば雲散霧消しているのは間違いのないことだ。

みんなもきっと、40年後のタイムマシーンに乗って、今という時代に戻ってくるといい。